

「颯修君ありがとう。僕のためにきつい練習をしてくれて。ぼくもコントロールがよくなるように、がんばっていくから。」

僕は今、こう式野球のチームでキャッチャーをしています。暑い日も寒い日も、練習の始めから終わりまで、必死にがんばっています。なぜなら、僕の将来の夢は、プロ野球選手になることだからです。

ピッチャーが投げた球が、ワンバウンドしてもとれるように、まず胸に当てて止める練習をしていたころ、

「胸のプロテクターに当てて止めよう。体をボールの方へ持つて行こう。」と、コーチから声がかかりましたが、その時は、まだこわさがありました。

「颯修君、ピッチャーのため、チームのために、キャッチャーはチームのリーダー、そしてまとめ役なんだよ。」

この言葉をいつも考えて練習を続けていました。そんな中で、ピッチャーの齋藤君からかけてもらった初めての言葉なのです。

この時、心が温かくなったのを今でも覚えています。そしてその夜、母にこのことを話しました。

「颯修、相手の気持ちを考えた優しい行動が通じたんだよ。相手の立場に立って考えることができたなんて、素晴らしいね。」

と言って、とても喜んでくれました。

「そうか、ピッチャーの立場から考えたのなら、ワンバウンドの球を投げてしまっても僕がとれば安心できるし、喜んでくれるんだな。」

それからです。ピッチャーをはじめ、チーム全員の表情を良く見て、気持ちを考え、守備をすることになっています。

試合開始。守備位置に付くと僕は大きな声で全員に声をかけます。

「しまっていこう。元氣出していこう。」

すると、みんなの表情が、明るくなるのがわかります。

そのことがあって、学校での生活にも目を向けてみようと思うようになりました。今日一日、学級はどんな雰囲気だったのか、友達はどうな表情で生活していたのかを考えるように心がけています。

ぼくは、もともと友達作りが得意な方ではありませんでした。自分の気持ちを素直に伝えることが苦手でした。しかし今は、自分にも相手のことを思いやり、勇気づける力があることに気がつきました。

朝、僕は教室に入って来る友達に、

「おはよう、今日もがんばろう。」

と声をかけています。学級がまるで野球のチームのように思えたのです。

「颯修君ありがとう、元氣が出て嬉しいよ。」

クラスの中のキャッチャー、僕はそうなりたいと強く思っています。